

(科目コード : 2000220004KK)

【改訂】第26版 (2014-03-13)

【科目】哲学

【科目分類】一般科目 【選択・必修の別】必修

【学期・単位数】前期・1単位

【対象学科・専攻】物質 4年

【担当教員】側瀬 登

【授業目標】

そもそも哲学とは何であるかを古代ギリシアに尋ね、哲学が科学をはじめとする諸学問の基礎づけであり、かつ主体的生き方の根拠の根源追求の営みであることを理解することができる。

そのために近代哲学の祖であるデカルトに「近代的自我」の典型を「モノローグの哲学」として捉えて、確認することができる。

そこに生じた個人孤立の問題を、「我と汝」の対話による「ダイアローグの哲学」として克服しようと試みたマルチン・ブーバーに学ぶ。

さらに私達の生活に馴染んでいて、日本文化の根底にある「仏教思想」を掘り下げ考えていくことで、リアリティのある自己確立の糧とすることができる。

ここには、足下にあるアイデンティティを探る自分探しの意味があり、また他人探しの意味もある。過去を尋ねることで現在の自分が少しなりとも分り、現在の自分が分ることで将来を構想することができる。

【教育方針・授業概要】

・本科目の総授業時間数は22.5 時間である。

・はじめに、先人から「学ぶ」と、自分自身で「考える」ことを「学而不思則罔、思而不学則殆」と「汝自らを知れ」の格言などから考える。

・「哲学」の語源を探り、「知を愛する」ことのモチベーション（動機づけ）に迫る。それが時代により変遷していて、今日ではどうかをも探る。

・人類史上で生み出された哲学的思考の基礎的範疇（枠組み）を概観する。

・古代ギリシアの代表として、プラトンの「イデア」とアリストテレスの「ウーシア」（実体）の要点を理解する。

それは以後の欧米の哲学史を貫く骨格とってさしつかえないものである。

・デカルトが何故に「疑う」ことを徹底しようとしたのか。そこから「コギト・エルゴ・スム」（我思う、ゆえに我あり）を導き出し、その「考える我」が生具の観念をもち、その中の無限の観念に神の結果（神）がある等と考える。この無限実体に対し「我」という有限実体が精神（思惟）と物体（延長）の心身二元を成し、また問題も生み出した、この過程を概観する。

・マルチン・ブーバーが客観化された「それ」ではなく、面前する「汝」との「関係能力」を哲学の根源としたのは何故か。「対話」とは、「汝」との真の言葉の交し合い「ダイアローグ」（対話）であって、「モノローグ」（独白）ではない。このことを理解し、今日での意義を考える。

・生活の中に、日本文化の中に馴染んでいる「仏教思想」から、大乘仏教の中観思想、唯識思想と華嚴や禅にも概要だが理解を深めて主体的考察の糧としたい。

【教科書・教材・参考書 等】

・参考書等では、基本書として、できれば次の本を読むことをすすめる。

・デカルト『方法序説』、『省察』（文庫本などで簡単に手に入る）

・ブーバー『我と汝』、『対話』（岩波文庫などにある）

・『般若心経』（解説を含め種々ある）、『龍樹』（講談社学術文庫ほか）

・その他として、

・ヤスパーズ『哲学入門』（新潮文庫ほか）

・渡辺二郎『初めて学ぶ哲学』（ちくま学芸文庫ほか）

・木田元『現代の哲学』（講談社学術文庫）

・今道友信『西洋哲学史』（講談社学術文庫）

・シュヴェーグラー『西洋哲学史』上・下（岩波文庫）など

【授業形式・視聴覚・機器等の活用】

・主として講義だが、討論、質疑、応答の活発であることを期待したい。

・アンケートは、授業の初回に示し、次回に提出。

【成績評価方法】

[前期]中間試験：40%、期末試験：60%

【達成目標】

| | 達成目標 | 割合 | 評価方法 |
|---|----------------------------|------|--------------------------|
| 1 | 哲学という学問の意義、目的、方法を理解する。 | 50 % | 中間試験20%、期末試験30%の割合で評価する。 |
| 2 | 哲学がこれまで対象としてきた主要な問題について学ぶ。 | 50 % | 中間試験20%、期末試験30%の割合で評価する。 |

【本校の学習・教育目標】

(A-1) 人文社会系の科目の学習を通じて、人間文化と社会生活について理解する。

【授業計画】（哲学）

| 回数 | 授業の主題 | 内容 | レポート | 宿題 |
|----|---|--|-----------------------------------|----|
| 1 | ・はじめに ・「哲学」とは何か。 | ・「知を愛する」という根源の探求を「哲学」の語源に見て、その1例をタレスのアルケー（始源）である「水」に探る。 ・科学をはじめ諸学問と哲学との関わりと違いを知る。 ・神話や宗教との関わりに触れる。 | ・アンケート（次回に提出）「自分にとり哲学のイメージと期待は何か」 | |
| 2 | ・哲学の動機づけはどこからくるか。（問いが答えを強いる） ・哲学的思考の基礎的範疇（枠組み） | ・哲学することの動機づけ（モチベーション）は種々である。 ・「驚異」：人は元来、幼児の質問連発のように知ることを欲する。「総ての人間は、生まれつき知ることを欲する。」 ・「知らんがためにわれは信ず」（アンセルムス） ・「懐疑」：教え、言い伝えそのままは疑わしいので真の知を得たい。 ・「限界状況」：ぬきさしならぬ自己の死、苦悩等とどう向き合うか。 ・「諸行無常」：総ての縁起する事象から成る移ろいゆく世に抛り所はあるのか。 ・人類史の「枢軸時代」（Achsenzeit）（BC. 5 C 前後）に見られる。（ヤスパース） ・孔子 ・ブッダ ・イエス（預言者とその後の） ・ソクラテス（とプラトン） | | |
| 3 | ・プラトンのイデア | ・イデアは「理性」によってのみ捉えられる形相・姿のことで、「感覚」による現象の世界は、その投影・影にすぎないとする。この永遠の实在を指すイデアは後の西洋哲学史を、その「一連の脚注」とまで言わしめる。（ホワイトヘッド） | | |
| 4 | ・アリストテレスのウーシア（実体） | ・ウーシアは、アリストテレスが師プラトンのイデアをエイドス（形相）として引き継ぎながら、それは半面で、他の半面を素材のヒュレ（質料）とし、その具体を指したものの。「理性」によって劣っているとされた「感覚」の回復がある。「主語となっても述語とならない」個別の具体性がある。 | | |
| 5 | デカルトの年譜、著作と概要 | ・デカルトは中世の「神学の侍女」とされたスコラ哲学とどう向き合ったか。デカルトの哲学体系を「知恵の木」の比喻から全体として概観する。 | | |
| 6 | デカルトの「良識」と「精神」 | ・『方法序説』から、「良識」の公平に与えられていること、また『省察』（一、二）から、「疑えること」と「思惟する我の確実性」を理解する。 | | |
| 7 | デカルトの「神の存在」 | ・『省察』（三、四）から、「思惟する我」にある生具観念として神の存在が因果律から導かれることを知る。信仰の神との違いにも気づく。 | | |
| 8 | デカルトの「精神」と「身体」 | ・『省察』（五、六）から、「心身」の實在的二元論とその問題を捉える。 | | |
| 9 | ブーバーの年譜、著作と原理 | ・ブーバー哲学の概要を、「我-汝」の原理から、「我-それ」である「近代的自我」を批判して生まれた理由を捉える。 | | |
| 10 | ブーバーの二つの根源語 | ・『我と汝』（一部）から、二つの根源語（「我-汝」と「我-それ」）が「我」の二つの態度から生れ、二つの「汝の世界」と「その世界」とを区分することを知る。 | | |
| 11 | ブーバーの「汝と語る能力」 | ・「汝の世界」で汝と語り、芸術、祈り、出会い、関係、愛とどう関連するかを考える。 | | |
| 12 | ブーバーの歴史哲学 | ・『我と汝』（二、三部）から、個人史と人類の歴史の共通点を見る。「人格」と「個我」の「我の振動」と個々の「我-汝」関係の延長としての「永遠の汝」を理解する。 | | |
| 13 | ・中観と唯識 | ・「色即是空、空即是色」の「空」とは。三層八識の「唯識無境」とは。 | | |
| 14 | ・華嚴と禪 | ・「一切即一、一即一切」とは。座禅とは、十牛図とは。「悩み苦しむ自分は本当にあるのか」 | | |
| 15 | ・おわりに | ・三木清の「技術論」とは。また暫定倫理としての「三徳五戒」の慈愛とは。（都合により変更もあり得る） | | |